〈可視と不可視のあいだ〉……詩と韻律と神秘主義と

神の御前＝不可視の世界へ還る

佐々木 あや乃

ここ一〇年近く、一二世紀のアッタールという詩人のペルシア語神秘主義詩『神の書（*Ilāhī-nāmah*）』を中心に、イスラーム神秘主義詩人の詩と対峙している。イスラーム神秘主義は、現世という可視界への一切の執着を捨て、生を享ける以前に魂が棲んでいた神の御前（みまえ）＝不可視界へ還ることを目指す思想である。神秘主義の究極の目標である「神との合一」は、つまるところ、自分の中の光の部分と闇の部分との合一を意味しており、精神の鍛錬による人間自らの昇華の極みといえるだろう。

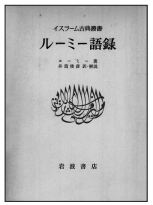
この神秘主義道を平易に語ってくれるペルシア神秘主義詩の代表作が、アッタール著『鳥の言葉――ペルシア神秘主義比喩物語詩』（黒柳恒男訳、平凡社〈東洋文庫八二二〉、二〇一二年五月）である。鳥たちが自分らの王たる霊鳥スィームルグを探す旅に出ることにし、数多の苦難に遭い多くの仲間の鳥たちが落伍者となり、最終的に霊鳥（スィームルグ）の許へ辿り着いた時には僅か三十羽しかいなかった、という枠物語に縁取られている（ちょっと『幸せの青い鳥』にも似ている）が、作品の醍醐味は多くの説話にある。その数多の説話の中で最も有名な物語が「シャイフ・サンアーン物語」である。神秘主義の高名な老師シャイフ・サンアーンが突然異教徒の娘に激しい恋心を抱き、地位も名誉も弟子も捨てる。真の愛を知った老師はやがて娘の許を去り再びイスラームに帰依し、神のお告げを受けた娘は老師の後を追うが、老師との再会を果たし息絶える、という実に劇的な物語である。この劇的なストーリーには、ペルシア語という言語そのものに内在するリズムの集合体―ペルシア語詩―という一種の音楽によってえもいわれぬ高揚感が伴う。この高揚感は原文に触れることによってのみ味わうことができる、ペルシア語話者・修学者の特権である。

ペルシア詩の韻律が生み出す、こうした高揚感に酩酊し、心から泉のごとく湧き出す言葉を残したのが、神秘主義詩の最高峰ルーミー（一三世紀）である。師シャムス・タブリーズィーへの陶酔した意識の産物『抒情詩集（*Ghazaliyāt-e Shams*）』や、ペルシア語のコーランともいわれる叙事詩集『精神的マスナヴィー（*Masnavī-ye ma'navī*）』は、井筒俊彦氏の言葉を借りれば「表現された意味に陶酔があるだけでなしに、意味を離れて、言葉の流れそのものに陶酔があり、言葉がそれ自体で神秘主義的陶酔」なのである。これら二作品は残念ながらまだ邦訳されていないが、代わりにルーミーが日常何を考え、何を感じ、何を話していたかを知る貴重な手がかりとなる散文作品が『ルーミー語録』（井筒俊彦訳・解説、岩波書店〈イスラーム古典叢書〉、一九七八年五月）である。原名は『フィーヒ・マー・フィーヒ（*Fīhi Mā Fīhi*）』といい、アラビア語で「その中には、その中にあるところのものがあるということ」を表す、いわばルーミーの談話集である。

こうした神秘主義詩人アッタールやルーミー、さらには恋愛抒情詩の巨匠サアディー（一三世紀）を凌ぐペルシア語詩の最高峰に君臨しているのが、一四世紀の詩人ハーフィズである。ルーミーが心からの情熱的なほとばしりで言葉を吐露したのに対し、ハーフィズはサアディー同様、文学という芸術たる「詩そのもの」を語らんとして五百篇弱の見事な抒情詩を詠んだ。その邦訳がハーフィズ著『ハーフィズ詩集』（黒柳恒男訳、平凡社〈東洋文庫二九九〉、一九七六年一二月）である。だが、決して訳者の技量の問題ではなく、やはりペルシア語の音の醸し出す空気感や心地よさは残念ながら伝わってはこないのである。

紙幅の関係上、この場でこのプラスアルファを創出するペルシア詩の韻律や音楽性について詳解することはできないが、ペルシア語を専攻すべく入学した新入生をはじめ、ペルシア語に興味を抱いた方々には、遠からぬ将来にこの高揚感を是非とも直接味わい、その価値を知る貴重な機会を手にしてほしいと切に願う次第である。

ささき・あやの　総合国際学研究院准教授　ペルシア古典文学

文献案内

アッタール『鳥の言葉――ペルシア神秘主義比喩物語詩』黒柳恒男訳、平凡社（東洋文庫）、二〇一二年
『ルーミー語録』井筒俊彦訳、岩波書店、一九七八年
『ハーフィズ詩集』黒柳恒男訳、平凡社（東洋文庫）、一九七六年